

---

# わが少年の日々のかがやき（冬休み編）

山之内 白洞人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

わが少年の日々のかがやき（冬休み編）

### 【Nコード】

N6466S

### 【作者名】

山之内 白洞人

### 【あらすじ】

今はもつどこにもない、甘くほろ苦い少年時代の思い出です。

昭和38年だった。

あの頃冬はめっぽう寒かった。

温暖化もないし、山里で人家もまばら、

それで冬はとてつもなく寒かった。

冬になると、毎朝霜柱が立った、雪国ではないので雪は年に数回降るくらいだったがそれでもふれば50センチ以上は積もった。

毎朝霜柱を踏んで登校、ざくざくと凍りついた地面は深深と冷えたものだった。

何でアンナに寒いのかというほど寒かった。

雑木林は凍りつき、木々の葉は霜で真っ白。

霜で白い地面。木々も霜で真っ白、雪も降っていないのに、世界は真っ白だった。

息は真っ白で煙のよう。

凍える手をすりあわせて登校したものだった。

霜のついたクモの巣をイヌタデの毛にからませて白いブラシを作ったりしたものだった。

雪が降ると、雪だるまを作ったり。雪すべり、竹を割ってみかん箱のそこに釘付けしてそりを作る。

それを交替で引いて積もった雪の上を引いて楽しむのである。

あるいはそれを持って川近くの雑木林に行き、斜面を滑り降りるのである。

その頃雪はめっぽうきれいだった。公害も排気ガスもなかった。で、私たちは雪を食べた。

ほんのり雪の香り？がした。

また、雪に砂糖をかけて食べると美味しかった。

まさに天然カキ氷である。

雪が屋根にもつもり、それが何日かすると大きなツララになった。晴れても冬の夜はとても寒かった。

朝見ると屋根から透明な氷柱が垂れ下がっていた。

それを傘の先で割るときの爽快感は今も忘れない。

きーンとして割れ落ちるのである。

川に注ぐ清水は崖のところで見事なツララになっていた。

流れ落ちる清水がそのまま凍っているのである。

雑木林は更に神秘の世界だった。

雪の明日に行つて見ると様々な足跡がついていた、

狐テン狸うさぎ、そして鳥の足跡も。

風で木々の枝の雪がはらはらと舞い落ちるとそれはまさに

晴天の降雪であつた、青空に舞う雪、

キラキラと光つて、幻想のシンフォニーを奏でるのであつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6466s/>

---

わが少年の日々のががやき（冬休み編）

2011年10月3日19時44分発行